

新約聖書における聖餐 ——救済史的視点からの概観——

山崎ランサム和彦

序

聖餐に関して現存する最古の記述は、使徒パウロが紀元50年代後半に記した、コリント人への第一の手紙の中に見出される。その中でパウロは聖餐のもつ意味について次のように述べている。「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。」(1コリント 11:26)。ここでパウロは、イエス・キリストを信じる者たちがパンと杯を分かち合うこの営みは、「主の死」つまりイエスの十字架の死という過去のできごとを告げ知らせるものであるという。しかし、イエスの十字架は、そこに至るイスラエルの歴史を抜きにしては到底理解することはできない。同時にパウロの聖餐理解には、「主が来られるまで」、つまり再臨への希望という側面も見られる。すなわち、新約聖書における聖餐は、過去と未来に向かう二つのベクトルを持っており、旧約聖書に記録されているイスラエルの歴史から、イエス・キリストの来臨、そして終末へと至る一連の救済史の流れの中で聖餐を捉えることが決定的に重要である。そこで、まず聖餐の旧約的起源を探るところから始めていくことにしたい。

1. 遠過去：イスラエルの物語

A. 出エジプト

旧約聖書に記録されているイスラエルの歴史の中で、最大の救済のできごと
は出エジプトであると言えることができる。モーセに率いられたイスラエルがエ
ジプトにおける苦役から神によって奇跡的に解放されたこの事件は、その後の
民族のアイデンティティの基盤となった¹。この出エジプトのできごとは、新約
聖書の聖餐の起源を考える際にも中心的な重要性を持っている。

1. 過越

イスラエルが実際にエジプトを脱出する発端となったのが過越のできごとで
ある。神はモーセとアロンを通して、イスラエルの全会衆に対し、家ごとに傷
のない一歳の雄羊を屠り、その血を家の門柱とかもいに塗り、その肉を、種を
入れないパンと苦菜と共に食べるように命じられた。その夜、主はエジプトの
地にあるすべての家の初子を滅ぼされたが、門柱とかもいに血のついているイ
スラエル人の家々は過ぎ越されたという（出エジプト 12：1-28）。

主は「この日は、あなたがたにとって記念すべき日となる。あなたがたはこ
れを主への祭りとして祝い、代々守るべき永遠のおきてとしてこれを祝わなけ
ればならない。」（14節）と命じられた。これ以降、イスラエルは毎年ニサン
月の14日に過越の祭りをを行い、主がなされた民族の救いのみわざを想起してい
くことになる²。

2. マナ

イスラエルがエジプトから脱出する際の食物が過越の小羊であったとすれば、
彼らが約束の地を目指して荒野を旅した間に与えられた食物はマナであった。

¹ たとえば申命 26：5-10。

² その後の歴史の中で、過越の祭りは次第に変化していく。スコットは中間時代に
起こった変化を、①手続きの細部における変化、②再解釈と意味の附加、③過越
と種を入れないパンの祭りととの区別の増大、の3点を挙げている。J・ジュリアス・
スコット『中間時代のユダヤ世界』（いのちのことば社、2007年）158-59頁。

神は天からマナを降らせ、イスラエルはカナンの地に達するまで40年間、マナ
を食べた（出エジプト 16：35）。マナはイスラエルに対する神のいづくしと
養いの表現である（ネヘミヤ 9：15、20-21）。マナは天から超自然的に与えら
れた食物で、詩篇 78：25の七十人訳では「天使のパン」と呼ばれている。パウ
ロはイスラエルの食べたマナを「御霊の食べ物」と呼んだ（1コリント 10：3）。

3. 神の御前での祝宴

神がイスラエルをエジプトから救い出した目的は、彼らをご自分の民とし、
またご自身が彼らの神となることであった（出エジプト 6：7）。神はシナイ山
で民に契約の律法を与えられたが、その契約の批准のため、全焼のいけにえと
和解のいけにえが捧げられ、その血が民に振りかけられた（24：1-8）。契約締
結の締めくくりは、神の御前で開かれた祝宴であった。「神はイスラエル人の指
導者たちに手を下されなかったので、彼らは神を見、しかも飲み食いをした。」
（11節）。

このように、イスラエルの救済的事件である出エジプトのナラティヴにおい
て、食事というモチーフが繰り返し表れることが注目される。人間の生命維持
のために不可欠な食事という行為が、神による救済のできごとと結びつけられ
ているのは偶然ではない。神は人間にいのちを与え、また養い続けてくださる
お方である。同時に、特に過越とシナイ山での祝宴においては、犠牲のモチー
フも見られる。

B. その他の旧約的背景

聖餐の旧約的背景として、たしかに出エジプトは重要な位置を占めているが、
それがすべてではない。いくつかが重要と思われるものだけを取りあげる。

小林信雄によると、主の晩餐の最も直接的なルーツは、旧約聖書における神
の国の祝宴である³。預言書には、終わりの日に神の国で催されるメシヤ的祝宴
についての言及が見られる（イザヤ 25：6-8、55：1-2、65：11-16、エゼキ

³ 小林信雄『主の晩餐』（日本キリスト教団出版局、1999年）24頁。

の罪の赦し、そして新しい契約が必要とされた。

II. 近過去：イエスの物語

パウロは初代教会で行われていた聖餐を、イエスが十字架にかかる前夜に弟子たちと持たれた最後の晩餐に起源を持つものと明確に位置づけている（1コリント 11：23-26）。しかし、最後の晩餐はイエスのミニストリー全体の背景を抜きにして理解することはできない。そしてイエスの生涯は、イスラエルの歴史のクライマックスでもあった。

A. 公生涯におけるイエスと人々との食事

食事はイエスの公生涯を通して頻繁に登場する重要なモチーフである。古代世界において、食卓の交わりは重要な社会的意味を持っており、誰と食事をするかということはその本人の評判を左右するものであった。その意味で、イエスがパリサイ人のような社会的に確立した地位を持つ人々だけでなく（ルカ 7：36、11：37-38、14：1）、あえて社会の中の周縁的な世界に生きていた人々（いわゆる「罪人」、取税人、娼婦等）と繰り返し食事を共にされた（マルコ 2：15-17 並行、14：3 並行、ルカ 15：1-2、19：1-10）ことは重要である。このような「罪人」との食事の交わりは、彼らを悔い改めに導き、神へ立ち返らせるためのものであった（ルカ 5：31-32）。イエスが弟子たちと持たれた最後の晩餐は、このような食事の交わりの終着点と言って良い⁷。

B. 終末におけるメシヤ的祝宴についてのイエスの教え

イエスは様々な人々と食事を共にされただけでなく、その教えの中で食事のイメージをしばしば取りあげられた。多くの場合、その教えは単なる食事ではなく、終末における神の国のメシヤ的祝宴についてのものである（マタイ 8：11 並行、ルカ 14：15-24 並行、22：29-30）。

⁷ Hans-Josef Klauck, "Lord's Supper," *The Anchor Yale Bible Dictionary* (New York: Doubleday, 1996), vol. 4, p.370.

エル 39：17-20、ゼパニヤ 1：7）⁴。これは終末における最終的な救済の祝福と喜びを表現する特徴的なイメージである。この祝宴に招かれるのはイスラエルの民だけでなく、その食卓は地上のすべての民族に開かれている（イザヤ 25：6）。それと同時に、神に背いた者はその宴から締め出されることが語られる（イザヤ 65：13）。つまり、この祝宴は神の救いと同時にさばきの表現であり、そこには開放性と閉鎖性が共に見られる⁵。

イザヤ 52：13-53：12 に描かれている苦難のしもべの姿は、最後の晩餐の重要な旧約的背景を提供している。ここで主のしもべはほふられる羊に喩えられ（53：7）、そのいのちを多くの人の罪を贖うために捨てる（10-12 節。マタイ 26：28、マルコ 14：24 参照）。イエスが間近に迫ったご自分の死について述べられた時、イザヤ書の苦難のしもべを念頭に置かれていた可能性がある⁶。

旧約聖書におけるイスラエルが抱えていた根本的な問題は、神がシナイ山で与えられた契約を守ることができないということであった。エレミヤ書では、神がシナイ契約に替えて新しい契約を与えようという終末的希望が語られる（エレミヤ 31：31-34）。

C. まとめ

イスラエルの民族的アイデンティティの土台をなしているのは、出エジプトのできごとである。それを通してイスラエルは神によって苦難から救い出され、その契約の民となった。その後のイスラエルの苦難の歴史の中で、ふたたび出エジプトのような救いが待ち望まれた。しかしそのことが起こるためには、民

⁴ この主題は、中間時代のユダヤ教諸文書によってさらに発展していくことになる。

⁵ エノク 62：14、2 バルク 29：3-8 等を参照。

⁶ 小林『主の晩餐』28-30 頁。エゼキエル 39：17 以下では、神の勝利の祝宴では裁きを受けて殺された者たちの血と肉が振る舞われるというイメージが見られる。

⁷ I. Howard Marshall, *Last Supper and Lord's Supper* (Exeter: Paternoster, 1980), p.89. 民のための贖いとして義人が殉教するという概念は、中間時代の 4 マカバイ 6：28-29、17：21-22 などにも見られる（ibid., pp.88-89）。Dunn はイエスご自身がイザヤ 53 章を意識しておられたと断言することは避けるが、この聖句について熟考された可能性は残している。James D. G. Dunn, *Jesus Remembered* (Grand Rapids: Eerdmans, 2003), p.817.

C. 供食の奇跡

イエスが行われた数多くの奇跡の中で、最後の晩餐との関係が大きいと思われるのは、五千人の供食と四千人の供食である。これらの奇跡には少なくとも二つの重要な旧約的な背景を求めることができる。

まず、これらの奇跡は出エジプト時のマナの奇跡を思い起こさせる。イエスご自身が、福音書において新しいモーセとして描かれていることはしばしば指摘されている⁸。五千人の供食が行われたのは「寂しい ἐρημος」所であったことが繰り返し語られるが（マタイ 14:13、15、マルコ 6:32、35、ルカ 9:12）、このギリシア語は「荒野」とも訳すことのできることであり、荒野でイスラエルがマナによって養われたできごとを想起させる⁹。そして、ヨハネははっきりと、この奇跡が出エジプトを記念する過越の時期に行われたことを述べている（ヨハネ 6:4）。

イエスの時代のユダヤ人の間では、終わりの時代に到来するメシヤは、モーセがしたのと同じく天からマナを降らせることが期待されていた¹⁰。イエスの供食の奇跡は当時のユダヤ人の群衆によってまさにこのように解釈された可能性は大きい。事実、この奇跡を見た彼らはイエスを「王にしよう」としたのである（ヨハネ 6:15）。

さらに、預言者エリヤとエリシャも人々に食物を奇跡的に提供したことが記されている（1列王 17:8-16、2列王 4:1-7、42-44）。特にエリシャによって増やされたパンを人々が食べてなお余した（2列王 4:43-44）という記述は、イエスによる供食とのつながりを強く感じさせる（マタイ 14:20、マルコ 6:43、ルカ 9:17、ヨハネ 6:13と比較せよ）。

同時に、この箇所と最後の晩餐との結び付きも無視することはできない。パ

⁸ たとえば、ルカ 9:31 では、変貌山上に現れたモーセとエリヤが、イエスがエルサレムで成し遂げようとしておられる ἐξόδος（文字通りには出エジプト）について語っている。

⁹ マルコ 6:39 では「青草」への言及があり、その場所が文字通りの荒野でなかったことは、福音書記者たちが「荒野」ということばを象徴的な意味で用いていた可能性を示唆する。

¹⁰ 2パルク 29:8。Brant Pitre, *Jesus and the Jewish Roots of the Eucharist* (New York: Doubleday, 2011), pp.90-92.

ンや魚を「取る」「祝福・感謝する」「裂く」「与える」というイエスの所作（マルコ 6:41、8:6以下および並行箇所）は、最後の晩餐においても見られるものである（マルコ 14:22並行）。

五千人の供食の奇跡は四福音書すべてに記録されているのに対し（マタイ 14:13-21、マルコ 6:30-44、ルカ 9:10-17、ヨハネ 6:1-15）、四千人の供食はマタイ 15:32-38とマルコ 8:1-10にしか記録されていない。五千人の供食は主としてユダヤ人を対象に行われた奇跡であったのに対し、四千人の供食にあずかった群衆の多くは異邦人であったと思われる¹¹。この二つの奇跡は、イエスがユダヤ人だけでなく異邦人にもいのちを与える主であることを表し、後の異邦人宣教を暗示するものと言える。そして、五千人の供食の後に四千人の供食が行われたという、マタイとマルコ両福音書に共通したできごとの順序も、福音はまずイスラエルに伝えられ、その後異邦人へ向かうという新約聖書のパターンに沿うものと言える。

D. 最後の晩餐

聖餐の起源として最も重要なのは、疑いなくイエスと弟子たちの最後の晩餐である。この食事は、イエスが公生涯における一連の食事の交わりのクライマックスをなすだけでなく、イエスの受難という文脈の中で行われた食事であるということが重要である。

1. 最後の晩餐と過越の食事

イエスが十字架にかけられたのは金曜日であったが、その前日の木曜日の夜にイエスが弟子たちと最後の食事を共にされたということは、四福音書すべてに共通している。しかし、その食事が過越の食事であったかどうかについては、議論が分かれている。

共観福音書は一致して、最後の晩餐が過越の食事であったことを明記している（マタイ 26:17、マルコ 14:12、ルカ 22:7-8）。ところがヨハネ福音書で

¹¹ 小林『主の晩餐』112-113頁を参照。四千人の供食が行われたのはデカポリス地方であった（マルコ 7:31）。

は、最後の晩餐が過越の前日に持たれたと取れる記述がいくつも見られる(13:1-2, 18:28, 19:14)。そこで、これまでに数多くの解釈が提出されてきた¹²。しかし、最後の晩餐がどの日に行われたにせよ、それが「過越の食事として」持たれたことは確かであると思われる¹³。

過越の食事はユダヤ人にとって、民族の歴史の出発点となった出エジプトのできごとを記念する重要な食事であった。過越の食事において、出エジプトという過去のできごとが現在に現実化され、追体験されたのである¹⁴。それはまた、将来における苦難からの解放も現実化するものであった¹⁵。

2. 聖餐の制定のことは

最後の晩餐において特徴的なことは、イエスがパンとぶどう酒を弟子たちに与えられ、しかもそれぞれについて説明を加えられたことである。この制定のことは、マタイ 26:26-29、マルコ 14:22-25、ルカ 22:17-20、そして1

¹² これらの解釈は、①共観福音書の記述が正しく、ヨハネは神学的理由(イエスは過越の小羊として殺された)によって日付をずらして書いた、②ヨハネの記述が正しく、最後の晩餐は過越の食事ではなかった、③共観福音書とヨハネ福音書の記述は両方とも正しく、日付の違いは複数の異なる暦の存在によって説明できる、という三つに大別できる。Robert H. Stein, "Last Supper," *Dictionary of Jesus and the Gospels* (Downers Grove: InterVarsity, 1992), 446 を参照。共観福音書の日付が正しく、ヨハネ福音書の記述は共観福音書の日付に矛盾しないという解釈については、Craig Blomberg, *The Historical Reliability of the Gospels* (Downers Grove: InterVarsity, 1987), pp.175-78 を参照。Marshall (*Last Supper*, p.142) は、ヨハネの日付が正しく、イエスはサドカイ派が採用していた公式の暦より1日早く過越を祝うパリサイ派の暦に従っていたとす。実際、ある人々が実際の過越よりも早く捧げものを持ってきたことがあったということを裏付ける資料がある。David Instone-Brewer, *Festivals and Sabbath* (TRENT 2A; Grand Rapids: Eerdmans, 2011), pp.129-35, 198-99 を参照。

¹³ J・エレミアス『イエスの聖餐のことは』(日本キリスト教出版局、1999年)134頁「たとえイエスの最後の晩餐が過越の前日の夜に行なわれたとしても、その場合にもイエスの最後の晩餐は過越祭の雰囲気包まれていた」。

¹⁴ ミシュナー・ベサヘーム 10:5では「いつの世代においても、人は自分が個人的にエジプトから脱出してきたかのように見なす義務を負う」とある。

¹⁵ 小林『主の晩餐』57-58頁。

コリント 11:23-26に見出すことができるが、互いに細部でことなっている。これらのうち、マタイはマルコの記述に依拠して細部を修正したと考えて良い。パウロとルカも多くの類似点があり、一まじめに扱われることもあるが、この二つの記述には軽視できない違いがあり、単純に一つにまとめることはできない。マルコ、ルカ、パウロによる資料はどれも、最古の制定ナラティヴの要素を同程度に含んでいる可能性がある¹⁶。最後の晩餐で実際にイエスが語られたことばを厳密に再構成することは不可能であるが、共通する基本的な流れは把握することができ。それをユダヤの過越の食事のコンテクストの中で見ていくことが重要である¹⁷。

過越の食事は、家長による祝福のことばから始まる。過越の食事では四回杯がふるまわれるが、祝福のことばに続いて最初の杯が乾され、前菜が食される。続いて過越の物語(ハガダー)が語られ、ハレル詩篇(詩篇113-118篇)の前半が歌われる。その後メインの食事に移る。ここで第二の杯と祝福のことばに続いて、種を入れないパン、過越の小羊、苦菜とジャムが食される。メインの食事が終わった後、第三の杯が飲まれるが、これは「祝福の杯」と呼ばれる¹⁸。そして、ハレル詩篇の後半が歌われ、最後に第四の杯が回されて過越の食事は正式に終了する。

以上が過越の食事の流れであるが、これに最後の晩餐を当てはめると、イエスが祝福のことばと共にパンを裂いて弟子たちに与えられたのは、メインの食事の初めであったと言える。ルカ 22:17-18に記されている「杯」はおそらく第二の杯であろう¹⁹。食事の後に回された第三の杯(「祝福の杯」)が、イエスのご自分の血と結びつけて説明された杯である。このように、実際の最後の晩餐では、パンと杯とはメインの食事を隔てて別々の時に弟子たちに与えられたことが分かる。それが後の教会の礼典においては一緒に取り扱われるようにな

¹⁶ Marshall, *Last Supper*, p.40.

¹⁷ イエス時代の過越の食事の手順については、エレミアス『聖餐のことは』127-30頁を参照。

¹⁸ 1コリント 10:16 参照。

¹⁹ Pitre, *Jewish Roots*, p.160.

っていった²⁰。

最後の晩餐において特徴的なのは、イエスがパンと杯の意味を説明されたことである。イエスはパンを取り、祝福してこれを裂き、「これはわたしのからだです *τοῦτό ἐστιν τὸ σῶμά μου*」と言って弟子たちに与えられた²¹。「これは〜です *ἐστιν*」を単なる象徴と取るか、あるいは実体的な同一視の表現と取るか、この箇所のみギリシア語の表現だけから決定することは不可能である。しかも、実際にイエスが弟子たちに話されたアラム語においてはギリシア語 *ἐστιν* にあたる繫辞はない。いずれにしても、イエスがパンをご自身のからだを表すものとして弟子たちに与えられ、それを食べるように命じられたことは確実である。

杯についてのイエスの説明は、マタイとマルコによると「わたしの契約の血」となっているのに対し、ルカとパウロにおいては「私の血による新しい契約」となっている。前者は出エジプト 24:8 でモーセによってイスラエルの民にふりかけられた「契約の血」への引喩であり、後者はエレミヤ 31:31 「新しい契約」への引喩である²²。ここでイエスは杯（つまりその中に入っているぶどう酒）をご自身の血を表すものとして弟子たちに与えられた。それは、エレミヤを通して約束された、モーセ契約に代わる「新しい契約」であり、しかもその契約はイエスご自身の血によって批准されるものであることが明らかにされたのである。この契約の血は、多くの人のための罪を赦すためのものであった（マタイ 26:28）。そしてこの新しい契約は、イスラエルを最終的に解放するメシヤ的勝利の文脈の中で与えられるものである²³。

共観福音書における最後の晩餐のナラティヴと、ユダヤの過越の食事を比較

²⁰ このことは同時に、初代教会においてはパンと杯によって挟まれた共同の食事自体も、これらの二つの要素と同じ重要性を持っていたことを示唆する。James D. G. Dunn, *The Theology of Paul the Apostle* (Grand Rapids: Eerdmans, 1998), p.618 参照。

²¹ 共観福音書のギリシア語原文の表現はこの部分では一致している。1 コリント

11:24 では *τοῦτό μοῦ ἐστιν τὸ σῶμα τὸ ὑπὲρ ὑμῶν* となっている。

²² ただし、エレミヤ書には血についての言及はないので、ルカとパウロの表現にも、暗黙のうちに出エジプト記への言及がなされていると思われる。Marshall, *Last Supper*, p.92.

²³ N. T. Wright, *Jesus and the Victory of God* (Minneapolis: Fortress, 1996), pp.560–61. Wright はゼカリヤ 9:9–11 のエコーをここで聞き取る（特に 11 節「契約の血」）。

して気づくのは、食事の締めくくりとなる第四の杯に関する言及がないことである。マタイ 26:30 とマルコ 14:26 では、「そして、賛美の歌を歌ってから、みなでオリーブ山へ出かけて行った。」とある。ここでの「賛美の歌」は過越の食事におけるハレル詩篇の後半であると思われるが、その後に飲まれるべき第四の杯を省略して、イエスと弟子たちは出かけていったように思われる。つまり、イエスの提供された新しい過越の食事は、未完結のまま残されたのである。ヨハネによると、イエスは十字架の上で息を引き取る直前に差し出されたぶどう酒を飲まれ、「完了した」と語られて息を引き取られた（ヨハネ 19:28–30）。Pitre によると、このぶどう酒がイエスの「第四の杯」であり、これによってイエスの過越が完結したという²⁴。この解釈の強みは、これによって最後の晩餐と十字架の結び付きが強化され、十字架上のイエスの死が「あなたがたのため」の犠牲の死であったことがより一層明らかになることである²⁵。

もう一つ、制定ナラティヴにおいて注目すべきは、その終末論的ベクトルである。イエスは最後の晩餐の席上で神の国の到来について語り（マルコ 14:25、マタイ 26:29、ルカ 22:18）、「わたしを覚えてこれを行いなさい」（ルカ 22:19、1 コリント 11:24–25）と語られた。イエスによる新しい契約は、神の国の到来をもたらすものであり、そこでイエスは弟子たちと共に（マタイ 26:29）再び親しい交わりを持つことができる。ここで、旧約聖書にくり返し表れ、イエスご自身も教えられた終末におけるメシヤ的祝宴が語られていることは明らかである。同時に「わたしを覚えて」という表現はイエスの不在を前提しており、神の国の（完全な）到来までには時間差があることを思わせる。ここから、「主が来られるまで、主の死を告げ知らせる」（1 コリント 11:26）というパウロ的聖餐理解まではあと一歩である。

²⁴ Pitre, *Jewish Roots*, p.168.

²⁵ Pitre (pp.169–70) が指摘しているように、イエス時代のユダヤ人にとって、十字架刑が神への犠牲であると言う発想は思いもよらぬものであった。初代教会のクリスチャンたちは、イエスの十字架の意味を最後の晩餐を通して解釈していたのである。

E. ヨハネ福音書における「いのちのパン」

ヨハネ福音書 13-17 章に描かれている、イエスと弟子たちの晩餐は、共観福音書における最後の晩餐と同じでできごとであることはほぼ確実であるが、興味深いことに、そこには聖餐の制定記事はない。

ヨハネ福音書において聖餐との関係がしばしば論じられるのは、6 章における「いのちのパン」に関するイエスの教えである。これは、過越の時期に五人の人人々に食物を与えられた後、カペナウムの会堂でユダヤ人に対して語られた教えである。ここでイエスはご自身を「天からのパン」と呼び、しかもそれをモーセがかつてイスラエルに与えた天からのパンであるマナと対比した。イエスの教えのポイント、イスラエル人はマナを食べてもやがて死んだが、まことの天からのパンであるイエスは永遠のいのちを与えるものである、ということである（ヨハネ 6：49-50）。

イエスはここで終末的メシヤである「人の子」（27、53 節）を「わたし」（史的イエス）と同一視されている²⁶。前述のように、ユダヤ人たちは終末に現れるメシヤが、かつてモーセが行ったマナの奇跡を再現することを期待していたが、イエスはモーセ以上の存在として、人々に永遠のいのちに至るパンを与えようという。しかも、そのパンはイエスご自身であると言われた。

ここから、イエスの教えはご自身の「肉を食べ、その血を飲む」という内容に向かう（52-58 節）。人の子であるイエスの肉を食べ、血を飲むだけが、永遠のいのちを持ち、終末の復活にあずかることができる。これらのイエスのことばは、人肉食を思わせかねない過激なイメージに満ちており、特に血を飲むことを律法によって固く禁じられていたユダヤ人の弟子たちの多くをつまずかせた。

このエピソードには、パンへの言及、イエスの肉と血を食べるようにとの教え、過越という時期的設定、イエスの受難から昇天へと至る公生涯のクライマックスへの言及（62 節）など、共観福音書における最後の晩餐とのつながりを思わせる多くの要素が見出される。福音書記者ヨハネは最後の晩餐に同席した人物であり（ヨハネ 13：23）、聖餐の制定の内容を当然良く知っていたはずで

²⁶ 小林『主の晩餐』199 頁。

ある。それではなぜ、ヨハネ福音書には聖餐制定の記事がないのだろうか。

おそらく、ヨハネは魔術的な礼典理解に反対する意図から、あえて制定記事を含めなかったのではないかと思われる²⁷。ヨハネ 6 章において繰り返しイエスはご自身を信じることの重要性を強調されている（29、30、35、40、47 節）。ヨハネが明らかに聖餐を思わせるイメージに満ちたこの教えを記録していることからして、ヨハネは決して聖餐という礼典自体に反対していたのではなく、むしろ聖餐の持つ霊的な重要性を強調したかったのではないかと思われる²⁸。

F. 復活の主と弟子たちとの食事

最後の晩餐は、イエスが弟子たちと共にした「最後」の食事ではなかった。復活後のイエスが弟子たちと食事を共にされた記事を新約聖書には何箇所か見出すことができる。これらの食事は、初代教会における聖餐の起源を探る上で重要な手がかりを与えてくれるものである。

まず、ルカ福音書では、復活の当日、つまり日曜日に復活したイエスが、エマオの途上にあった二人の弟子に現れた次第が物語られている（ルカ 24：13-35）。このナラティヴで特徴的なことは、弟子たちには最初イエスの正体が分からなかったことである。ところが目的の村へ着いた時、「彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった。」（30-31 節）。イエスの所作は明らかに最後の晩餐を思わせるものである。

ルカ福音書の 24 章ではこれにつづいて、エルサレムで弟子たちの間に現れた

²⁷ Klauck, "Lord's Supper," vol. 4, p. 367; Marshall, *Last Supper*, pp. 136-39. 聖餐にあずかり、パンとぶどう酒を飲む行為がそれ自体によって、あとはどのような生き方をしようとも、救いが保証され、災いから守られるという魔術的な聖餐理解は、コリント教会にも見られたものであり、パウロはそれに厳しく警告を発している（1 コリント 11：27-30）。Ernst Käsemann, *Essays on New Testament Themes* (Philadelphia: Fortress, 1964), pp. 115-17 参照。

²⁸ Marshall (*Last Supper*, p. 138) によると、ヨハネは anti-sacramental の立場ではなく、critically-sacramental の立場である。

イエスが焼いた魚を食べてみせるといふ記述があるが²⁹ (42-43 節)、これを弟子たちとの食事と考えることができるかどうかは微妙である。しかし、使徒の働きでははっきりと、ペテロを含む弟子たちと復活の主が食事を共にされたことが書かれている (使徒 1:4, 10:41)²⁹。

ヨハネ福音書 21 章では、復活のイエスがガリラヤ湖畔でペテロとヨハネを含む弟子たちに現れ、弟子たちに焼いた魚とパンの朝食を与えられた (9-13 節)。イエスが弟子たちにパンと魚を与えられたことは、五千人の給食を想起させるものであるが、それは上述のように最後の晩餐とのつながりが濃厚なテクストである³⁰。

このように、イエスと弟子たちとの食事の交わりは十字架の死で終わったわけではなく、復活後も継続し、おそらく昇天の直前まで継続していたことが分かる。このような「復活の主との食事の交わり」は、昇天後の教会における聖餐の実践の直接的な起源の一つであると言って良いだろう³¹。

G. まとめ

最後の晩餐は、公生涯を通じて持たれたイエスと弟子たちとの間の食事の交わりのクライマックスであったが、それが過越の文脈の中で行われたことにより、その意味は更に大きな救済史的な流れの中に位置づけられることになった。イエスは全体として伝統的な過越の食事の形式に則りながら、ご自身の十字架の死と結びつけることによって、その意味を変容させた。それは「新しい」過越であり、しかもイエスの過越であった。イエスは最後の晩餐において新しい契約を制定され、十字架で流されたご自分の血によってそれを批准しようとき

²⁹ 使徒 1:4 における動詞 *συνάγειν* は、新改訳本文にあるような「いっしょにいる」という訳の他に、「食事をともにする」と言う訳も可能であり (新改訳欄外注、NIV 参照)、F・F・ブルースはこちらの訳を採用している。『使徒行伝』[いのちのことば社、2000 年] 41 頁。使徒 10:41 では「共に食べる *συνεσθίον*」[共に飲む *συντρίβω*] という動詞が用いられ、これらの食事が主と共になされたものであることが強調されている。

³⁰ その意味で、20 節で最後の晩餐への言及があるのは興味深い。

³¹ Klauck (‘‘Lord’s Supper,’’ vol.4,p.366) は、イエスの復活が主の晩餐の実践の基礎であったという。

れた。これらすべては、イエスの十字架によって新しい出エジプトが始まり、救済史において新しい時代が始まることを意味している。復活後のイエスの食事の交わりは、そのような新時代における主と弟子たちとの交わりを表し、初代教会における聖餐への道を開くものであった。

III. 未来：神の国の祝宴と再臨

A. 神の国の祝宴

旧約預言者たちやイエスが終末における神の国の祝宴の希望について語ったことについてはすでに述べた。イエスの教えの中で、聖餐との関係において特に重要なのはルカ 22:29-30 である。ここでイエスは弟子たちに「わたしの父がわたしに王権を与えてくださったように、わたしもあなたがたに王権を与えます。それであなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食事をし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」と語られている。旧約預言者の語った神の国の祝宴は、王としてのイエスが主催する祝宴であることが明らかにされている。それにイエスを信じる弟子たちが招かれているのである³²。

この教えが最後の晩餐の席上で語られたことは重要である。ルカの記述によると、イエスはそこで神の国の到来について語り (18 節)、パンの分かち合いについて「わたしを覚えてこれを行いなさい」(19 節)と命じられた³³。神の国の食卓についての教えは、この制定ナラティヴの後に述べられている。つまり、最後の晩餐は神の国の祝宴のプレビューであり、弟子たちは神の国で王なるイエスの食卓に連なる時まで、それを繰り返していくことが命じられているのである。

³² 並行記事のマタイ 19:28 には食卓への言及はない。黙示録 3:20-21 では、イエスが教会に入ってきて信じて信じる者と食事を共にするというメッセージが、父から与えられた王としての権威 (「父の御座」) を持っているイエスが、信じる者とともに座らせるといふメッセージと同時に語られるが、ここにはルカ 22 章の神の国の食卓のイメージと通ずるものがある。

³³ 1 コリント 11:25 によると、杯についても同様の命令がなされている。

B. キリストの再臨

このような終末的な方向性は、パウロによる聖餐制定のことばの中にも見られる(1コリント11:23-26)。ここでパウロは、ルカと同じく、パンについてのイエスのことば「わたしをおぼえて、これを行いなさい」を記録しているが(24節)、それだけでなく杯についても同じことばを記し、しかも「これを飲むたびに ὁσάκις」ということばが付け加えられている(25節)。最後に、パウロ自身による解説「ですから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに ὁσάκις、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。」(26節)が付け加えられている。「主が来られるまで」というパウロのことばには、聖餐がキリストの再臨までの期間に限定された行為であるという意味³⁴とともに、クリスチャンたちが聖餐のパンを食べ、杯を飲むたびに主の到来を待ち望むというニュアンスも感じられる。

C. まとめ

新約聖書における聖餐は、未来の現実化でもある。それは来るべき神の国の祝宴の前味である。このイメージの起源は旧約聖書にまで遡ることができるが、新約聖書においては、神の国の祝宴はイエスの再臨の時に起こるものであり、またイエスは終末の祝宴のホストであり主役でもある(黙示録19:7-9「小羊の婚宴」)。いうなれば、キリスト論的に解釈された旧約聖書の終末的希望が聖餐のいまひとつのテーマである。

IV. 現在：初代教会における聖餐の実践

聖餐の過去に向かうベクトルがイエスの十字架の死を指し示し、未来に向かうベクトルが再臨を指し示すとすれば、現在は復活の主との交わりと、それにあずかる者同士の一致によって特徴づけられる。

³⁴ このことは、イスラエルが約束の地に入った時に、マナが降るのが止んだというヨシュア5:12の記事と対応している。パウロが1コリント10:3において、聖餐との並行関係においてマナについて触れていることから、パウロの念頭にはこのこともあったと考えられる。

A. 主の晩餐

新約聖書において聖餐は様々な呼称で呼ばれているが、パウロにおいては「主の晩餐」(1コリント11:20)あるいは「主の食卓」(10:21)と呼ばれる。いずれの場合も、それは「主 κύριος」に関わるものであることに注目したい。パウロにとって「主」というイエスの称号はその神性を表している³⁵。初代教会には、聖餐において力強い生ける神としての「主」イエスが臨席しておられるという意識があった³⁶。さらに、旧約聖書における神の国の祝宴が「万軍の主」の催される祝宴である(イザヤ25:6)ことを思い起こす必要がある³⁷。パウロにとつて聖餐は神である主イエス・キリストの晩餐であるが、それは同時に旧約における神の国の祝宴を(少なくとも部分的に)成就するものであった。

それでは、パウロにとつて主の晩餐は具体的にどのような意味を持っていたのだろうか。パウロは聖餐の杯を祝福し、パンを裂くことは、キリストの血とからだに「あずかること κοινωνία」であるという(1コリント10:16)³⁸。ここでは、キリストとの深い交わりとともに、キリストにある他のクリスチャンと

³⁵ Thomas R. Schreiner, *New Testament Theology* (Nottingham: Apollos, 2008), pp.326-27 参照。

³⁶ Larry W. Hurtado, *Lord Jesus Christ* (Grand Rapids: Eerdmans, 2003), p.146.

³⁷ ここで「主」はマソラ本文ではיהוהであるが、七十人訳では κύριος である。

³⁸ ギリシア語 κοινωνία は「参加する、共有する、交わる、密接な関係を持つ」といった様々な意味合いがある。16節ではキリスト御自身との κοινωνία ではなく、キリストの血やかちだとの κοινωνία について語られているので、「共有する」というニュアンスが強い。ただし、パウロはこの聖餐理解を、異教における儀礼的事対比して論じており、コリント人たちが「悪霊の食卓にあずかり(21節)、その結果「悪霊と交わる」(20節)ことのないように警告を与えている。20節で用いられているギリシア語は κοινωνός、文字通りには「悪霊と κοινωνία を持つ者」の意であり、そこでは悪霊と交わるというニュアンスが見られることから、パウロはキリストとの交わりとしての κοινωνία の概念も念頭に置いていると考えられる。旧約聖書においては、神の御前での食事(出エジプト24:11、申命12:7、12、18)という概念はあっても、神との親しい交わりとしての食事という概念はなかった。パウロの κοινωνία 概念は、この意味で旧約からの前進であったと言える。小林『主の晩餐』138頁。

の交わりも含めて考えられている³⁹。この後者の側面、すなわちキリストにある教会の一致は、次の17節で明確に表されている。「パンは一つですから、私たちは、多数であっても、一つのからだです。それは、みなの方がともに一つのパンを食べるからです。」ここでは聖餐によってキリストの「からだ *σῶμα*」なる教会の一致が体現されている。

教会の一致という問題は、パウロが1コリント11章において聖餐に言及する直接の理由をなしている。コリント教会では、聖餐の機会に裕福な信者たちが自分たちの食物を持ち込んで宴会を始め、貧しい兄弟姉妹たちをはずかしめるという事態が起こっていた(20-22節)。パウロはそのような行為は聖餐の主旨に真向から反するものであると厳しく叱責する。「みからだ *σῶμα* をわきまえないで」(29節)というパウロのことばは、この全体的な文脈の中で考える必要があるだろう。つまり、パウロがここで問題にしているのは、教会の一致をないがしろにしながらか聖餐にあずかろうと一部のクリスチャンたちの態度なのである⁴⁰。パウロがコリント人に望んでいることは、キリストのからだの一致を回復することであるが、それには食物を分かち合うという具体的な愛の行為が含まれていただろう⁴¹。

そして忘れてはならないのは、パウロにとって聖餐とは「主の死を告げ知らせる」ものである(1コリント11:26)。主の死は「あなたがたのための」ものであった(24節)。これは罪人を義と認める犠牲の死である(ローマ5:8-9参照)。「告げ知らせる *καταγγέλλω*」という動詞は、新約聖書では未信者への宣教に多く用いられる語であり(たとえば使徒13:5)、聖餐の文脈でも、主の死を告げ知らせる対象をクリスチャンのみに限定する理由はないと思われる。

しかし、そこで告げ知らされる「死」は今も生きてクリスチャンたちと

³⁹ Gordon D. Fee, *The First Epistle to the Corinthians* (NICNT; Grand Rapids: Eerdmans, 1987), p.466.

⁴⁰ Ibid., pp.563-64; Richard B. Hays, *First Corinthians* (Interpretation; Louisville: John Knox, 1997), pp.200-201.

⁴¹ 11:33で新訳聖書が「待ち合わせる」と訳しているギリシア語 *ἐκδέχομαι* はむしろ、食べ物や飲み物を分け合うと言う意味での「(互いに) 受け入れ合う」と訳す方が良い。Bruce W. Winter, *After Paul Left Corinth* (Grand Rapids: Eerdmans, 2001), p.151.

κοινωνία を持たれる主の死である。つまり、パウロにとって、聖餐とはイエス・キリストの十字架の死と同時に復活と高挙までを含めた概念であると言わなければならない。パウロにとって聖餐とは、十字架におけるキリストの死によって成し遂げられた救いを思い起こすと同時に、今も生きておられる復活の主との交わりであり、その交わりを通して教会の一致が体現される重要な営みであった。

B. パン裂き

使徒の働きには、「パンを裂く」という特徴的な表現が登場する⁴²。この表現はまず、五旬節の日にエルサレムで誕生したばかりの教会の描写として、2章42節と46節に登場する。特に46節「そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、」では、パンを裂く行為が「食事」とは区別されていることから、前者は通常の食事とは区別される儀式的食事を意味しているのではないかと思われる⁴³。

使徒20:7では、「週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。」とある。パウロの一行がそのために集まった「屋上の間」(8節)は、最後の晩餐とのつながりを意識させる(マルコ14:15、ルカ22:12)⁴⁴。

使徒27章には、ローマへ護送される船上で嵐に遭ったパウロが、同船している一同に食事を摂ることをすすめ、パンを裂く場面がある。ここでのパウロの、パンを「取り」「感謝をささげ」「裂いて」(35節)という一連の所作は、最後の晩餐におけるイエスのそれを強く想起させる。しかも、使徒2:46と同様、

⁴² クルマンが指摘するように、「パンを食べる」ではなく「パンを裂く」という表現は食事を表すには奇妙なことばである。オスカ・クルマン『原始キリスト教と礼拝』(新教出版社、1957年)18頁。

⁴³ ここで問題となるのが、この行為が「毎日」行われていたとされていることである。Klauck (‘Lord’s Supper,’ vol.4, p.366) は、これは教会最初期の黄金時代を理想化した表現で、実際には週一度くらいの頻度で、安息日か主日に持たれていただろうと考える。しかし、最初期には毎日行われていた聖餐の頻度が、時が経つにつれて週1回ペースに変化していったと考えることもできよう。

⁴⁴ Klauck (‘Lord’s Supper,’ vol.4, p.366) は交わり(7節)や光(8節)、いのち(12節)という要素に聖餐の場の象徴的重要性を見る。

パンを裂く (35 節) と食事を取る (36 節) 行為が区別して書かれていることから、この行為も聖餐であったと取る学者もいる⁴⁵。

これらの「パン裂き」の箇所では、ぶどう酒への言及はない。ぶどう酒は常に入手可能であるとは限らなかったもので、時には省略されたとも考えられる⁴⁶。あるいは、パンのみに言及することで、パンとぶどう酒の二つの要素を含む聖餐を代表させていたと考えることもできる⁴⁷。

使徒の働きにおける「パン裂き」の箇所がすべて聖餐を指しているかどうかは、はっきりと断言することは難しい⁴⁸。しかし、聖餐のように重要な教会の営みが使徒の働きの中で記録されていないと言うことは、不可能ではないまでも、極めてありそうにないことには思える。いずれにしても、使徒の働きの「パン裂き」には、パウロにあるような主の死を覚えるという側面よりは、復活の主が臨在される食事において、キリストにある救いを喜び祝う (2:46) 側面が見られる⁴⁹。

C. 愛餐

ユダ 12 では、「愛餐 ἀγάπη」という語がみられるが、これはクリスチャンが共同で持っていた食事を指す。2 ペテロ 2:13 でも同様の食事について語られ

⁴⁵ Ibid., vol.4,p.366.これに対して、これは聖餐ではなかったと考える学者もいる。たとえば Ben Witherington III, *The Acts of the Apostles* (Grand Rapids: Eerdmans, 1998), pp.772-73. 一方、これは聖餐ではなかったとしながらも、神がパウロを通して人々を救われる聖なる瞬間であると言う意味で、聖餐へのエコーを聞き取る学者もいる。Darrell L. Bock, *Acts* (BECNT; Grand Rapids: Baker, 2007), p. 740.

⁴⁶ Marshall, *Last Supper*, p.132.

⁴⁷ Klauck ("Lord's Supper," vol.4,p.366) は、ぶどう酒を含まない聖餐が持たれた例があることは認めつつ、一般にはぶどう酒も含めて考えられていたと主張する。最初期の聖餐において、最後の晩餐と同様に、パンを裂く行為が祝福の杯と実際の食事を挟んで隔てられていたとしたら、最初のパンを裂く行為だけによって、杯も含めその後が続くすべての行為を表したと考えることもできる。

⁴⁸ 懐疑的な立場としては、たとえば James D. G. Dunn, *Beginning from Jerusalem*

(Grand Rapids: Eerdmans, 2009), pp.198-200.

⁴⁹ Marshall, *Last Supper*, p.133.

ているが、「愛餐」の言葉は使われていない⁵⁰。「愛餐」は聖餐の別名であった⁵¹。初代教会では、儀式としての主の晩餐と、愛餐とは区別されていなかった⁵²。この「愛餐」という表現には、クリスチャン相互の実際的な愛の表現としての共同の食事というニュアンスが良く表れている⁵³。

V. まとめ

以上、新約聖書における聖餐について概観してきた。紙幅の関係で触れることの出来なかった主題は多々あるが、これまで見てきたことをまとめてみたい。以上の考察から明らかになったのは、聖餐はすぐれて救済史的な営みであるということである。キリスト教会の聖餐はイエスが弟子たちと持たれた最後の晩餐なしにはありえなかった。しかしその最後の晩餐も、イエスの公生涯のクライマックスとしての受難というできごとの文脈で理解されなければならず、イエスのミニストリーを理解するには、そこに至るイスラエルの救済史を理解する必要がある。

聖餐はイエスを「覚える」行為 (ἀνάμνησις) である。これに対応するヘブル語 זָכַר はただ単に過去の出来事を思い起こすということを超えて、過去の出来事が現在においてふたたび現実化することを意味する⁵⁴。イエスを覚える行為はイエスがなされた救いのみわざを現在に再現実化することである。しかし、イエスによる救い (新しい出エジプト) は神がイスラエルに対して行った救いのみわざ (出エジプト) の予型的な再現実化に他ならない。イエスを覚えるとは、イスラエルの神を覚えることにほかならないのである。

聖餐は過去を現在にあって現実化するだけではない。それはまた、未来をも現実化する。聖餐は終末における神の国の祝宴の先取り、プレビューである。

⁵⁰ いくつかの写本では ἀγάπης の読みがみられるが、これはユダ 12 の影響による後代の修正であろう。

⁵¹ Ibid., p.110.

⁵² Klauck, "Lord's Supper," vol.4,p.368.

⁵³ Everett Ferguson, "Agape Meal", *The Anchor Yale Bible Dictionary* (New York: Doubleday, 1996), vol.1,p.90.

⁵⁴ Klauck, "Lord's Supper," vol.4,p.363.

それは旧約の預言者たちが語り、イエスが教えられた神の国の最終的な救いの祝福の前味を、現在において味わうことにほかならない。

このように、聖餐はイスラエルの過去から終末へと至る救済史全体の縮図である。ユダヤ教の過越が過去と未来を共に現在において現実化するのと同様に、聖餐は過去と未来の結節点となる。過去から未来に続く神の救済の歴史の中に自らを位置づけることにより、神の民は自らのアイデンティティを獲得するのである。キリスト教会の聖餐がユダヤ教の過越と異なっている点は、そのキリスト論的理解である。キリストがすでに来られ、神の小羊がすでに屠られたことにより、歴史は新しい段階に入った。聖餐においては、「主」としてのキリスト、キリストの主権が重要なテーマである。今やキリストが、新しい神の民のアイデンティティを決定する。主の晩餐の食卓には、ユダヤ人であれ異邦人であれ、信じるすべての人が招かれている。このように、聖餐は救済史であると同時に徹頭徹尾キリスト論的である。言い換えれば、聖餐はユダヤ教的な救済史をキリスト論的に再解釈する。しかしそのキリストは、イスラエルの歴史から遊離した存在ではなく、イスラエルが待ち望んでいたメシヤに他ならない。したがって、聖餐を通して教会はイエスの物語とイスラエルの物語を二重に現在化する⁵⁵のである。

聖餐の意義は、この過去から未来に向かう運動の線上においてはじめて明らかになる。聖餐が教会において繰り返されるごとに、救済史における過去と未来はそのつど現在化され、神の民に來し方行く末を指し示すのである。聖餐は終末の時代を生きる教会を前進させる原動力なのである。

(リバイバル聖書神学校校長)

⁵⁵ N.T. Wright はこのゆえに聖餐を “a deliberate double drama” と呼んだ。 *Jesus and the Victory of God*, p.554.